

トシテ應急ノ處置ヲ取り器具、機械、標本等ヲ購入セリ 其支出額ハ金貳万參千貳百貳拾七圓拾四錢四厘ナリ 標本ノ内外國ヘ注文セシ分ニシテ未到着ノモノアリシヲ為メト改築ニ伴フ設備ニシテ改築工事豫定ノ通り進捗セサルヲ以テ設備ヲ見合セタルモノ等アリシヲ為メ金壹千參百五拾貳圓八拾五錢六厘ハ明治二十二年二月法律第四號會計法第二十二條ニ據リ翌年度ヘ繰越セリ

一、本校校舍改築ニ伴フ講堂ノ設備ヲ要スルヲ以テ毎年度之レカ費用ヲ要求セシモ許可ナク漸ク四十三年度ニ於テ圖書標本閲覧室ノ設備ト合セ金貳千圓交付アリシノミ スク少額ノ經費ニテハ十分ノ設備ヲ為スコト能ハス漸ク其幾分ノ設備ヲ為シ得ルニ過キス 然ルニ四十三年度ニ於テハ改築工事豫定ノ通り進捗セサルト其他ノ事由ニヨリ支出シ能ハサルニヨリ金壹千五百圓ヲ本年度ニ繰越シ本年度ニ於テ全部支拂ヲ為セリ

一、本校ニ於テ将来豫算ノ増額ヲ要スルモノ、内緊要ト認ムヘキ分ハ甲款ノ職員及将来施設上重要ト認ムル件、ノ項ニ於テ説述セラルニヨリ本項ニハ之レ略ス

『東京美術学校校友会月報』記事抜粋

東京美術學校近事〔九〕^卷四^号 M・四四^年・二・二八^日

嗚呼本校の災厄

萬籟聲なくして天地眠り、寒星獨り陰森として大塊を監視するかと怪まるゝ、明治四十四年一月二十五日の午前零時を少し過ぐる頃、不幸にして本校本館の玄關附近より火を失し、猛火は炎々として勢

を逞うし、東北の風さへ加はりたるに、折悪くも消火栓には給水少かりしかば、蒸氣唧筒も施すに術なく、遂に本館、新館、並に圖書師範科、元文庫等の數棟は猛火の毒舌に舐め盡され、午前四時頃に至りて漸く鎮火したり。今少しく火災に關することを左に記して校友諸氏に報することゝなさんとす。しかはあれ、明治二十二年開設以來の我校舍の一朝にして灰となりたることを記すの已むを得ざるに至る、思ふて茲に及べば轉々筆端の澁滯拘束せらるゝを覺ゆるなり。

△出火の當時 當校常宿直の羽田〔禎之進〕囑託が本校の失火なる事を知りたるときは、既に玄關よりは炎烟を噴き出して入ること能はず、已むを得ず、裏に廻りたるが、廊下よりは防火壁（兩開きの戸に鐵板を張れり）の堅く鎖されたために入るを得ず、窓もまた同じく堅牢なる構造にして、外部よりは手の付け様もなく、其内に火勢はますゝ猛烈となりたりければ、夫れゝ應急の處置をなしたるが、遂に消防には力及ばずして斯かる大事に至りたるなり。

△水利缺く 本館新館共に教育博物館として建てたるものなれば、廊下は中央に通じたるもの^{（のみ）}にて、各室は各鍵を掛けて閉鎖しあり、外部の構造は前述の如くなるを以て、失火の場合にありては消防の不利なるは言ふべくもあらず、報知によりて駆け付けたる蒸氣唧筒の來りし頃は、既に本館の全部は炎々たる火焰に包まれ、今や廊下を通ぜる後部の新館に移らんとする際なりしかば、蒸氣唧筒も此處にて防ぎ留めんとて消防に盡力したりしが、折悪くも水道の消火栓に些少の水ありしのみにて、斯かる大建築の火災に用立つべくもあざりしかば、本郷給水所並に淀橋給水所等に急を報じて供給

を仰ぐ始末なりしかば、遂に急遽の間に合はず、火勢の荒るゝに抵抗する能はずして、本館、新館其他数棟を烏有に歸せしめたるは誠に歎すべきなり。

△焼失の建物 失火は上野公園の奥なりと認めて、第一に駆け付けたる竹内「久一」教授を始め、急報に接して駆け付けし正木「直彦」校長其他の職員諸氏も、火勢の猛烈と建築の堅牢なるとに施すべき術なく、殊に水利の缺けたるは斯くの如き大火となりし一原因と思はれたり。其焼失の建物左の如し。

本館	(木造)	壹棟	二階建	二二七、三七
新館	(同)	同	同	一三六、五三
彫刻教室及銃器室	(同)	同	同	三六、〇〇
師範科	(同)	同	同	四五、〇〇
同(金工室)	(同)	同	平家	一五、〇〇
同(木工室)	(同)	同	同	一七、五〇
彫刻科研究室	(同)	同	同	一一、〇〇
教官室	(同)	同	同	一一、〇〇
倉庫	(木骨練瓦)	同	同	一一、〇〇
雑建物	(木造)	三棟	同	九、〇〇
廊下建坪				一一九、五〇
合計				六三一、九〇

以上の如くにして、登録せる之が価格は金三萬九千四百餘圓なれども、こは舊き時の價格にして本校財産簿に記され居るものなれば、目下の評價にてはその數倍にも上るべしといふ。



本校火災の状況 (『東京美術学校校友会月報』第9卷第4号より転載)

△御眞影の安全 御眞影は會計掛の金庫に奉安しありしが、斯かる猛火の裡にあることなれば、正木校長始め職員一同大に憂慮し、その無事を祈りつゝ、眞先に此附近の消火に力を盡したるが、金庫の前面は焼け爛れたる處ありて開くを得ざりしかば、其製造所なる國末金庫店より三人を派出せしめて、午前八時頃より開扉に著手し、午後一時半頃に至り、漸く無事なることを確め得たるを以て、正木校長は直に捧持して文庫の樓上に移し奉り、職員一同茲に愁眉を開きたるは、不幸中に在りて洵に喜ぶべきことなりき。

△標本の焼失 標本の内に在りて焼失したるものも亦少からず、之が概要を記せば、日本畫科にありては高野山國寶惠心僧都筆廿五菩

薩來迎圖の模寫三幅となり居る中の一幅、大徳寺國寶五百羅漢の模寫四卷を始めとして、玉章翁筆樹木寫生大卷物、一遍上人繪卷模寫三卷、仇英筆集美人模寫一卷、同裂下夜宴圖模寫一幅、伴大納言繪卷模寫三卷の中一巻並に其他の模寫標本等。西洋畫科一二年教室及彫刻科塑造部にて使用せる西洋より取寄せありし石膏標本は殆んど全部灰燼と化し、彫刻科の木彫部牙彫部にては諸教授の製作に成れる標本其他悉く烏有に歸し、私有の参考品も不尠燒失せり。圖畫師範科にても、木工金工の道具類を運び出したる外、参考品の大部分を失ひたるは、惜むべきことなり。

△書類の燒燼 發火の場所は如上玄關附近なりしかば、庶務教務會計三掛の書類は、金庫外のものを取り出す暇なく、大半燒失せるを以て、掛員諸氏は日夜その復舊に努めつゝあり。本校開始以來の書類にして跡方もなくなりたるは、洵に惜むべく、其復舊の困難なる察すべきなり。

△火災後の授業 火災後は差向き日本畫科西洋畫科には郊外寫生を課し、彫刻科には動物園等に就て寫生をなさしめ、師範科は會議室にて授業せる等臨機の處置をなして、兎も角も授業を繼續し、此間において整理をなし、早きは一月末遅きは二月に入りてより、新築校舎の一部を割き、又は道場を教場に充て、若くは新築中の校舎の一部に於て授業することゝなれり。

△文庫と新築校舎 文庫及新築の圖案金工等の校舎は幸に災厄を免れたるを以て、眞蹟等の貴重品は損害を蒙らず、又新築校舎のありたるため、教室事務室等を設くるに便利を得たるは不幸中の幸といふべし。

△發火の場所と原因 當日庶務教務會計掛の職員は午後四時過ぐる頃各退出したるを以て、當番小使黒田友太郎、白樂岩次郎の兩名は掃除を擔當し、小使水野三津次は火鉢の火を取り去りて之を既定の場所に持運び、當直巡視其跡を検したるは例日の如くなりしといひ、又當直校丁關源太郎は午後十一時より構内を巡視して異狀を認めざりしとのことにて、發火の原因は詳かならず、火鉢の殘火なるべしと推測するものあり、怪火ならずやと揣摩するものあり、場所もまた明かならざれども、羽田當直が驅付けたるとき、戸の隙間より玄關の左方の最も赤きを認め、門前交番所の巡查もまた玄關南脇の窓より最も早く焰を噴き出したるを見たりといへるより推察するに、發火の場所は兎に角玄關廊下より南側なるは疑ふべきにあらざるが如し。

△燒失の損害高 罹災の損害は大畧前にも記したる如くなるが、今之を類別したる所を聞くに總高金七萬一千八百餘圓にして、その内譯左の如し。

圖書	金三百廿六圓
標本	金一萬三千二百五十九圓餘
器具	金一萬五千八百四十六圓餘
器械	金百六十三圓餘
材料等	金二千七百九十四圓餘
建物	金三萬九千四百十三圓餘

△燒失せし本館 本館は明治十年教育博物館として工部省の手に成

りし建築と傳へられ、用材は檜にして而も建築法の堅牢親切なるは、建築家も嘆賞する所のものなりしかば、一二月月の後には、目下新築中の校舎に引移り次第之を取毀ちて、其建築の法を更め、新校舎の前面に之を引移すの計畫なりしが、僅なる時日の差にて此由緒ある建物を失ふに至りたるは惜むべきことなり。因にいふ今回餘燼中より本館の屋根瓦と覺しきものを拾得せしが、之れには「明治九年東京博物館」の文字が篆書にて二行に鐫り出だされあるを見る。△災後餘聞 以上の焼失と共に文部省は焼失せる校舎及圖書標本の價格取調を本校に命ぜられ、本校亦夜を徹して之を調査し、その結果、復舊及新築費の一部を補ふ爲め拾貳萬餘圓を追加豫算として本期議會に提出することに決定せりといふ。

○本校一覽配付の困難 本年の一覽は既に刷成済にて、卒業生諸氏へそれ／＼配付の手順中なるが、卒業生宿所名簿も焼失したるため、目下の奉職者には大抵送付することを得れども、自營者の中には住所不明となりたるものもありて、従て之を送付する能はず、掛員は手を盡して取調べ居れども、多數の人なれば悉く分明するや否や計り難きを以て、是等の人々の住所等は、朋友諸氏よりは其知り得る限りを、本人よりも又之を本校に申出でらんことを望み居るといふ。

○本校の生徒募集 今回募集せらるべきは、豫科凡百人（日本畫二十人、西洋畫二十五人、彫刻十八人、圖案十人、金工十人、鑄造十人、漆工七人の割）師範科二十人にして、入學手續の詳細は豫科の分は本年一月十九日の官報廣告に、師範科の分は昨年十二月八日の

官報廣告に載せたり。

東京美術學校近事〔九一五。M・四四・三・三一〕

○小林助教の留學 本校助教小林萬吾氏は、去る二月三日、西洋畫研究のため、滿三ヶ年間佛國伊國獨國へ留學を命ぜられたるが、來る四月初めには、留學の途に上らるべしといふ。

東京美術學校近事〔九一六。M・四四・四・三〇〕

○大澤〔三之助〕島田〔佳矣〕兩教授の出張 大澤教授は三月二十四日より一週間を以て佐賀縣へ、島田教授は同月二十三日より三週間を以て鹿兒島縣へ出張せらる。

○海野教授の復職 日英博覽會のため昨年三月末に渡英せられし休職海野（美盛）教授は、去る三月三日無事歸朝せられ、同月二十七日復職を命ぜられたり。

○久米〔桂一郎〕教授の歸朝 同教授もまた日英博覽會の用務を帯びて、昨年三月末休職後渡英せられたりしが、去る三月二十三日無事歸朝せられたり。

○谷、長兩氏の解雇 本校助手たりし谷齊一氏は三月三十日付、同長愛之氏は四月一日付を以て願により各解雇せられたり。

○校醫の囑託 去る三月三十一日付を以て上野櫻木町濱野病院長たる、醫學博士濱野大吉氏に、本校校醫を囑託せられたり。

○第二十回卒業式 本校第二十回卒業證書授與式は、去る三月二十九日午前十時より昨年新築の工藝部校舎に於て舉行せられたり。式場は圖案科教室中の廣間を以て之に充て、一同着席するや、正木〔直彦〕學校長は一場の式辭報告をなし、次に本科生五十三人、撰科生十二人、圖畫師範科生十六人に卒業證書を授與せられ、尋で卒業生に對して告辭を陳べられ、次に小松原〔英太郎〕文部大臣の訓辭、卒業生總代日本畫科土橋三郎氏の答辭ありて式を終れり。而して當日は階下の四室と階上の一室とに各科の卒業製作を陳列し、來賓の隨意觀覽に供し、猶廿九日の午後と三十日は、關係者の觀覽を許したり。その卒業生八十人の姓名並に文部大臣の訓辭は左の如し。

卒業生姓名（○印は圖畫教員志望者）

日本畫科（十六人）

本科	土橋 三郎	福島縣平民
同	○南部 茂	高知縣平民
同	戸田 正夫	岡山縣平民
同	○柴田健次郎	愛媛縣土族
同	○渡邊 泰輔	新潟縣平民
同	○富田 一昭	奈良縣土族
同	○戸部 隆吉	石川縣平民
同	○青山 扶	島根縣平民
本科	○大山 文吉	東京府土族
同	跡部 直治	東京府土族

西洋畫科（二十四人）

同	○清島 長次	長崎縣平民
同	○足立 季彦	高知縣土族
撰科	矢澤 貞則	長野縣土族
同	江森 天壽	埼玉縣平民
同	森山驥三郎	東京府土族
同	柏木 正賢	神奈川縣平民
本科	○山口 亮一	佐賀縣土族
同	○大久保喜一	埼玉縣平民
同	中野 營三	香川縣土族
同	○佐野 貞雄	福島縣土族
同	脇 龜太郎	徳島縣平民
同	富田温一郎	新潟縣土族
同	○鈴木 長治	新潟縣平民
同	鈴木 秀雄	東京府土族
同	大野 隆徳	千葉縣平民
同	横井 禮一	愛知縣平民
同	菊池 五郎	茨城縣土族
同	小寺 健吉	岐阜縣土族
同	○諸澤 虎雄	秋田縣土族
同	東 守七	三重縣平民
同	○庄子 勇	宮城縣土族
同	人見 彌	愛知縣平民

同 猪飼 公正 大阪府平民
 同 ○三宮 知義 北海道平民
 同 ○濱田 盛基 熊本縣土族
 同 中溝 四郎 佐賀縣土族
 同 坂井 戒爾 東京府華族
 撰科 李 岸 清 國
 同 本吉 勝造 北海道平民
 同 曾 延年 清 國

〔彫刻科(九人)〕

本科 入谷 昇 香川縣土族
 同 橋本久米二郎 茨城縣土族
 同 和田 季雄 東京府土族
 同 鶴崎 乙也 兵庫縣土族
 同 山田 勝 大阪府平民
 同 大藏 雄夫 石川縣平民
 撰科 建島彌一郎 和歌山縣平民
 同 關野金太郎 神奈川縣平民
 同 鹽澤角之助 栃木縣平民
 圖案科(八人)
 本科 ○高橋昇太郎 京都府平民
 同 ○伊井彌之助 富山縣平民
 同 ○千熊 宇平 鳥取縣平民
 同 ○小川 正雄 長野縣土族
 本科 ○西村小二郎 東京府平民

同 ○幡野久太郎 愛知^[1]民
 同 ○藤本 稔 香川縣土族
 同 ○中井彌五郎 香川縣平民
 金工科(五人)
 本科 北原 千祿 香川縣平民
 同 海野 清 東京府平民
 同 黒川 廣吉 香川縣平民
 同 小糸源太郎 東京府平民
 撰科 三好 眞長 香川縣土族

鑄造科(二人)

本科 太田 靜一 大阪府平民
 撰科 時岡鐵次郎 新潟縣平民
 漆工科
 本科 木村 清 東京府平民
 圖畫師範科(十六人)
 筑瀬由太郎 奈良縣平民
 中根 孝治 山梨縣土族
 今井伴次郎 群馬縣平民
 安藤 義茂 愛媛縣平民
 秋山 任 茨城縣土族
 野口 涉 愛媛縣平民
 岡登 貞治 長野縣平民
 湧口 滿 福井縣土族
 中津 安彦 熊本縣土族

文部大臣訓辭

- 田中 寬 熊本縣平民
 吉田 久 埼玉縣平民
 佐藤七之助 山形縣士族
 堀 秋成 長野縣平民
 山本 四郎 神奈川縣平民
 山岸 貞一 山形縣士族
 飯田 文一 富山縣平民

一國ノ美術ハ其ノ國民情操ノ精華ニシテ、洋ノ東西ヲ問ハス、各々其ノ淵源スル所甚遠クシテ且深キモノアリ。故ニ苟モ美術ヲ以テ世ニ立タント欲スル者ハ、必スヤ先ツ古來ノ美術ノ精髓ヲ會得シテ、鑢心刻苦、英ヲ含ミ華ヲ咀ヒ、圓融渾成シテ以テ自家立脚ノ地ヲ定ムルヲ要ス。若シ根底ノ修養ヲ閑却シテ、浮華輕佻猥リニ新ヲ競ヒ奇ヲ出スニ汲々タラハ、一國美術ノ精神ヲ喪ボシ、新ニ得ル所ナクシテ止マンノミ。本校教養ノ趣旨ハ、實ニ諸子ヲシテ先ツ其ノ根底ノ修養ヲ深ウシ、以テ他日工夫ノ素地ヲ成就セシムルニ在リ。願フニ諸子本校ニ學ブコト僅ニ數年、或ハ前賢ノ藩籬ヲ望テ未タ其ノ堂奥ニ上ルコト能ハサルモノアラン、其ノ根底ノ修養未タ必スシモ深厚ナリト云フヘカラス、卒業ノ後尙研鑽ヲ怠ラス、専ラ藝術ノ練磨ヲ積ムニ非サレハ、其ノ成業ノ得テ期スヘカラスルハ言フ俟タス、諸子其レ之ヲ努メヨ。

又惟フニ美術ノ國家風教ノ上ニ迨ホス影響ノ至大ナルハ、蓋シ言ヲ須キサル所ニシテ、國家カ諸子ニ期待スル所ハ、繪畫ト言ハス彫塑ト言ハス、高尚優雅ニシテ其ノ作品ハ世ノ風教ヲ裨補スルモノタラサルヘカラス。然モ高尚優雅ニシテ氣品アル作品ハ、必ス作者ノ高尚ナル人格ニ俟タサルヘカラス。故ニ諸子ハ常ニ國家社會ニ對スル、地位責任ノ重大ナ

ルヲ思ヒ、畜ニ將來ニ於ケル技能ノ大成ヲ期スルノミナラス、勗メテ人格ヲ修養シテ風尚ヲ高ウシ。氣節ヲ尚フノ風ナカルヘカラス。若之ヲ惟レ念ハスシテ、放縱自恣ニ流ルルカ如キコトアラハ、假令手腕ノ秀拔ナルモノアルモ、畢竟一箇工匠ノ類ノミ、本校ノ卒業生トシテ、美術家ノ本分ヲ盡ス所以ニ非サルナリ。諸子其レ之ヲ念ヘ。

若夫レ教育ノ任ニ當ルモノハ、其ノ職務ニ忠實ナルハ勿論、惻誠以テ生徒ヲ指導シ、畜ニ技藝ノ師タルノミナラス、人格德操ニ於テモ、亦克ク生徒ノ師表トナリ、以テ薰陶ノ實ヲ舉ケンコトヲ期セヨ。

爰ニ本校卒業證書授與ノ式ヲ舉クルニ方リ、之ヲ諸子ニ諭ゲテ以テ祝辭ニ代フ。

○新入學生 本校豫備科中西洋畫科圖案科の志望者及圖書師範科入學試驗は、去る三月三十一日より四月四日迄の三日間施行せられたる結果により、其他の科の入學志望者は無試験にて、四月七日の官報を以つて入學を許可せられたるもの左の如く、總計百〇八人なり。

豫備科

日本畫科志望 (十九人)

- | | | | |
|-------|-------|-------|-------|
| 井上豊太郎 | 森 修 | 内田 雅愛 | 阿部 務 |
| 桑田利三郎 | 菅村 文次 | 小村 清乘 | 渡邊 繁明 |
| 佐藤 直己 | 遠藤 誠 | 北原 大輔 | 秦 法成 |
| 城戸 懋 | 鴻巣 善藏 | 鷹巢 豊治 | 山本 茂麿 |
| 大塚 庄近 | 田中 恭吉 | 小西 陸郎 | |
| 遠山 教圓 | 耳野卯三郎 | 名越 豊 | 賀來清三郎 |
- 西洋畫科志望 (三十六人)

安部三太郎	大沼林右衛門	吉澤廉三郎	柿崎 清助
幸福 光次	龜井 實	草光 信成	清水 良雄
寺内萬次郎	中村 義夫	鶴見 守雄	木村 圭三
坂本竹四郎	石橋 武助	藤森 靜雄	鈴木 俊平
大崎豊次郎	早川桂太郎	小糸源太郎	河井 清一
高山藤五郎	小川 潔	伊東 哲	宮地 茂
石川 全	大槻 憲二	鈴木 保徳	角野判治郎
織田 信夫	曾宮 喜七	志賀 正人	兼光 豊治
彫刻科塑造部志望(八人)			
大矢 誠	雨田外次郎	古谷 忠夫	本間 久雄
永瀬 義郎	久本 信男	三浦秀之助	恩地孝四郎
圖案科志望(十人)			
小倉 淳	清水 吉臣	棚田 多作	木下 唯親
原 三郎	大野 爲次	前田健二郎	林 威三
佐之井憲治	三和 精一		
金工科志望(五人)			
吉川秀一郎	一里山金助	大竹 節	町川惣太郎
鑄造科志望(四人)			
丸山 義男	波多野龜三郎	小川菊三郎	山本與三次郎
漆工科志望(四人)			
生駒 弘	長谷川 廣	川村利兵衛	高野 重人
圖畫師範科(二十二)			
吉田 嘉吉	田中 卓爾	塚田 清吉	尾川藤十郎

宮崎 確	平岡 信敏	木南三千三	宮森正三郎
接待 庸夫	久保 一	小林 長太	那須 義美
今富 稔	本間 忠三	横山 貞通	西銘 生樂
中島繼次郎	大脇 朝一	高橋 房雄	中堀 愛作
太田政太郎	小林 辰知		

東京美術學校近事〔九一七。M・四四・五・三〇〕

○高村教授の出張 教授高村光雲氏は、内務省古社寺保存會の用務にて、四月二十三日より三週間、京都府及滋賀縣へ出張せられたり。

○新入學生 前號所報の入學者の外、土岡泉氏は四月十一日豫備科(日本畫科志望)へ、清水彦太郎氏は同十四日同科(彫刻科塑造部志望)へ入學を許可せらる。

○卒業 西洋畫撰科卒業期田中塊一氏は病氣のため試験延期中なりしが、四月十五日卒業せられたり。

○研究科入學 本年三月末卒業せられたる諸氏の中、研究科へ入學せられたるは左の如し。

日本畫本科卒業	土橋 三郎
同	渡邊 泰輔
西洋畫本科卒業	大久保 喜一
同	佐野 貞雄
同	脇 龜太郎
同	富田 溫一郎

同 鈴木良治
 同 大野隆徳
 同 横井禮一
 彫刻本科卒業 入谷昇
 同 橋本久米二郎
 同 撰科卒業 鹽澤角之助

以上四月七日入學許可

日本畫撰科卒業 矢澤貞則
 西洋畫撰科卒業 曾延年
 彫刻本科卒業 和田季雄
 同 鶴崎乙也

以上四月十二日入學許可

東京美術學校近事〔九一八。M・四四・六・二六〕

○小林留學生の出發 文部省留學生なる本校助教教授小林萬吾氏は、去る四月廿六日佛國へ向ひて出發せられたり。

○久米〔桂一郎〕休職教授の復職 同氏は五月廿四日付を以て復職を命ぜらる。

○香取〔秀真〕囑託の出張 同氏は學術研究のため大阪府奈良縣へ出張を命ぜられ、五月廿九日、一週間の見込にて出發せらる。

○大澤〔三之助〕教授の陞等 同氏は六月二日付にて高等官四等に陞叙せられたり。

○研究科入學 左の諸氏は五月十日研究科へ入學せられたり。

日本畫本科卒業生 増田久太郎
 同 中島彦
 西洋畫本科卒業生 鈴木秀雄
 彫刻撰科卒業生 井上直伍
 圖案本科卒業生 小川正雄

東京美術學校近事〔九一九。M・四四・七・二四〕

○本校職員の日英博行賞 本校職員の中、昨年開設の日英博覽會に盡力したる廉に依り、六月二十日付を以て、正木〔直彦〕學校長は勲四等旭日小綬章を授けられ、教授久米桂一郎氏は勲六等瑞寶章を授けられ、教授大澤三之助氏は農商務省より銀杯壹個を、囑託關係之助氏も同しく銀杯壹個を贈られたり。

○教員檢定委員の任命 本校教授久米桂一郎、囑託小島憲之、同原六四郎、同乙竹岩造、同岡田起作の諸氏は、孰れも六月二十三日付を以て、文部省の教員檢定委員會臨時委員を仰付けられたり。

○教授の出張 本年暑中休暇中夏季講習會講師として各地方へ出張せらるべきは、猶其他にもあるべけれど、今確定せる處は、白濱〔徵〕教授は圖書教授法講習會講師として、帝國教育會の外、京都市教育會、神戸市教育會、廣島縣教育會、佐賀縣教育會、岡山縣教育會、廣島縣教育會等主催の講習會へ出張せらるべく、島田〔佳矣〕教授は、七月は秋田縣下の圖案講習會に、八月は山形縣下の圖案講習會に出張せらるべし。

○大築氏へ博士號授與 元本校教授にして目下囑託員なる大築千里

氏は、六月二十六日、工學博士の學位を授けられたり。

○小林留學生の着佛 本省留學生本校助教授小林萬吾氏は、六月十六日無事に巴里へ着せられたりといふ。

東京美術學校近事〔二〇一〕。M・四四・九・二九

○林〔美雲〕、黒岩〔倉吉〕、兩助教授の出張 當夏季休業中に於て本校彫刻科標本製作のため、林助教授は滋賀縣下三井寺及京都府下神護寺へ出張せられ、黒岩助教授は奈良市興福寺法華寺へ出張せられたり。

○大築千里氏の解囑 大築博士は從來工藝化學を擔任し居られしが、願によりて去七月三十一日を以て、囑託を解かれたり。

○修學旅行に付職員の出張 例年の如く九月中旬より三週間を以て、各科卒業期生徒は、京都府、滋賀縣、奈良縣、和歌山縣へ修學旅行をなすべきに付、その指導監督のため、教授竹内久一、助教授松岡輝夫、書記増井兼吉、雇荒木榮治の四氏は、八月十五日付にて、該府縣下へ出張を命ぜられ、九月十二日出發せられたり。

○職員中の美術審査委員會委員 本年秋季に於ける、文部省美術展覽會審査委員として、本校職員中より任命せられたるは、正木〔直彦〕、校長を始め、黒田〔清輝〕、岩村〔透〕、川端〔玉章〕、高村〔光雲〕、石川〔光明〕、竹内〔久一〕、久米〔桂一郎〕、岡田〔三郎助〕、和田〔英作〕、寺崎〔広業〕、白井〔保次郎〕、小堀〔鞆音〕の諸氏にして、孰れも去八月十七日、該委員仰付けられたり。

○助手の任命 本校西洋畫科卒業生田邊至氏は、九月二日本校雇を

命ぜられ、西洋畫科助手を申付けられたり。

○特待生の選定 本年九月より一學年間特待生に選定せられ（七月十五日發表）授業料を免ぜられたる諸氏は左の如し。

富田賢太郎（日一） 狩野 守久（日一） 篠田十一郎（日三）
内田他治郎（日三） 中村彌藤治（西一） 淺井 政藏（西二）
酒井 榮之（西三） 林 健市（彫二） 田邊 孝次（彫三）
堀 義二（彫三） 淺野 廉（圖一） 藤村彦四郎（圖二）
手島 達雄（金一） 石崎 誠二（漆二） 五十嵐三次（漆二）
香川源四郎（漆四）

備考（日一）は日本畫科一年なり、餘は之に做ふ。

○職員諸氏の近況 暑中休暇中に於ける職員諸氏の動靜を聞くに、正木〔直彦〕校長は千葉縣下の保田に避暑せられ、岩村〔透〕教授は岡田助教授（秀氏）と同道にて、信州八ヶ嶽麓の上高地温泉へ赴き、勇を振ふて日本アルプスと稱する燒嶽の横斷を試みられ、沼田〔勇次郎〕教授は相州三崎方面へ、鹿毛〔屋藏〕助手は房州保田へ福井〔江亭〕教授は、大分縣の毛筆畫講習會より九州地方を漫遊せられ、小場〔恒吉〕助手は大和國榮山寺より同國の古社寺を巡禮して研究を遂げられ、乙竹〔岩造〕講師は郷里の三重縣下へ、關〔保之助〕講師もまた三重縣及京都府下へ、本多〔利実〕師範は福島縣の若松市へ、千頭〔庸哉〕助教授は揮毫のため福島縣下飯坂温泉へ、寺崎〔広業〕教授は信州上林温泉へ、高村〔光雲〕教授は小形上宮太子原型の彫刻に従事せられ、竹内〔久一〕教授は富嶽登山を試みられ氣篋當るべからず、白山〔松哉〕教授は武州青梅在の鶴の湯へ、白濱〔徵〕島田〔佳矣〕の兩教授は前號に記せる通り各地の

講習會へ、鶴田〔幾太郎〕助教授及八卷〔於菟三〕助手は郷里の山梨縣下へ、波根〔義三〕助教授は房州の北條へ、大畧以上の如くなりとのことなれど、尙此外にも聞洩せる人々もあるべし。

東京美術學校近事〔二〇—二。M・四四・一〇・二六〕

○大村〔西崖〕教授の復職 兼て休職中なりし同教授は九月八日、復職を命ぜられたり。

○大澤〔三之助〕教授の敘位 同教授は、九月二十日正六位に敘せらる。

○撰科生入學 嚮に募集中の本校各科撰科生は、無試験のものを除くの外、九月十三日より試験を舉行せられし結果、左の如く同月二十二日入學を許可せられたり。

西洋畫撰科

山口縣士族 河井 隆一

朝鮮平安南道 金 觀鎬

清國廣東省 雷 毓湘

彫刻撰科（塑造部）

沖繩縣士族 渡嘉敷眞山戸

東京府平民 高木菊太郎

大分縣平民 小野 清生

岩手縣平民 菅原 勝次

石川縣平民 黒田 豊治

同 科（木彫部）

茨城縣平民 長塚 廣造
東京府士族 松永 義治
宮城縣平民 遊佐 孫三

同 科（牙彫部）

茨城縣士族 山下 正次

金工撰科

鹿兒島縣士族 前田 實

東京府士族 宮川 郁雄

東京府平民 齋藤龍太郎

以上の中、西洋畫撰科は募集せざりしも、前記の三人は特別入學を許されたるなり。

○本校内の文部省講習會 文部省に於ては十月三十日より二週間、本校内に於て圖畫教授法講習會を開かるべし。該講師は教授白濱徹（圖畫教授法）文學士菅原教造（色彩學大要）紀淑雄（審美學大要）の三氏にして講習員は各府縣の師範學校中學校高等女學校教員なりといふ。

東京美術學校近事〔二〇—三。M・四四・十一・三〇〕

○古宇田〔実〕教授の出張 同教授は學術研究のため、去る九月末より十月にかけ、茨城縣下へ出張せられたり。

○乙竹〔岩造〕囑託の敘位 同氏は十月二十日、正六位に敘せられたり。

○美學講師の囑託替 兼て美學を擔任し居られたる瀧〔精一〕講師



第3回図画教授法講習会記念 明治44年11月6日
 前列中央正木直彦, その右講師白浜徹, 左同紀淑雄, 左2人目菅原教造

は、願によりて十月二十三日囑託を解かれ、文學士澤村專太郎氏に同日美學講師を囑託せられたり。

○講習会の講師と書記 文部省にては明治四十四年度第三回師範學校中學校高等女學校教員講習會を本校内に開かるゝに付、白濱(徹)教授は十月五日同會講師を、増井(兼吉)書記は十月二十三日同會書記を、孰れも文部省より囑託せられたり。

○助手の任命 西洋畫科卒業生金山平三氏は、十一月七日付を以て、西洋畫科助手を命ぜらる。

○本校の修學旅行 本年の修學旅行は十月三十一日より十一月二日迄三日間を以て施行せられ、先づ三十一日には上野より出發し、成田の不動を経て香取神宮に詣で、同夜は佐原町に宿し、翌日は船にて鹿島神社を拜し、洋々たる利根川を下りて蘆荻の間に風光を賞し、銚子に上陸して犬吠岬に一泊し、淼渺たる海波の天に接する處、白帆の來去、怒濤の澎湃をながめ、翌日附近の各所を巡覽して歸京したり。

○本校内の文部省講習會 兼て記したる如く、文部省にて開催せる圖畫教授法講習會は、十月三十日より十一月十一日迄本校内にて開かれたり。集まりし人々は全國各學校に於ける左記の諸氏にして、十一日の午前十一時より文部次官並に參事官臨場せられ、講習證書授與式を舉行し、各自歸任の途に就かれたり。

講習會出席者姓名

東京府第一高等女學校	。荻生 守俊
東京府女子師範學校	。谷 鎌太郎
東京府第四中學校	馬場 三郎

東京府私立成女高等女學校 鈴木 てふ
 東京府私立上野高等女學校 黒澤たま子
 東京府私立日本橋高等女學校 鈴木 けん
 埼玉縣女子師範學校 中西 理英
 千葉縣東金高等女學校 太田 久男
 新潟縣長岡女子師範學校 藤卷 直治
 新潟縣三條中學校 秋保 親美
 群馬縣太田中學校 關口固一郎
 長野縣師範學校 芳川 廷輔
 福島縣私立石川中學校 有安 助二
 福島縣師範學校 服部 保一
 北海道小樽高等女學校 上野 セツ
 北海道函館高等女學校 北條 盛英
 宮城縣師範學校 小圃 立二
 岩手縣一關中學校 萩谷 伴雅
 青森縣師範學校 山崎 勇馬
 青森縣女子師範學校 伊藤萬龜三郎
 青森縣八戸高等女學校 三輪 正
 山形縣師範學校 佐藤 左内
 三重縣高等女學校 北村森之助
 愛知縣工業學校 淺沼 鼎
 愛知縣知多郡立高等女學校 村上庄治郎
 静岡縣掛川中學校 丹羽五十吉
 滋賀縣女子師範學校 北垣巳之助
 滋賀縣彦根高等女學校 磯島 喜六
 滋賀縣師範學校 今井 重信

岐阜縣大垣中學校 樋口 英夫
 岐阜縣岐阜高等女學校 伊藤 清華
 福井縣師範學校 野村 厚生
 京都府女子師範學校 竹内 次郎
 京都府立第二中學校 鈴川 信一
 大阪府夕陽丘高等女學校 山田 廉
 兵庫縣御影師範學校 岡村 道三
 兵庫縣豐岡中學校 野口 峯吉
 兵庫縣明石女子師範學校 作井彌三平
 高知縣師範學校 大和田篤治
 高知縣第四中學校 野島 覺
 鳥取縣師範學校 三隅禎三郎
 島根縣松江中學校 竹下 一郎
 島根縣杵築中學校 安岡 信義
 岡山縣私立金川中學校 折井太一郎
 廣島縣師範學校 中津 守夫
 廣島縣忠海中學校 堀田鹿之助
 香川縣丸龜高等女學校 森 勝治郎
 香川縣師範學校 森崎 清
 香川縣高松高等女學校 巖本 定次
 愛媛縣西條中學校 高瀬 半哉
 愛媛縣大洲中學校 藤村伊勢吉
 福岡縣女子師範學校 水上 泰生
 福岡縣福岡高等女學校 加藤 紀高
 福岡縣直方高等女學校 宮崎 秀勇
 佐賀縣佐賀中學校 森 三美

佐賀縣佐賀高等女學校

熊本縣師範學校

熊本縣商業學校

熊本市熊本女子高等小學校

宮崎縣宮崎郡立職業學校

鹿兒島縣女子師範學校

鹿兒島縣師範學校

秋田縣本莊中學校

秋田縣横手中學校

東京美術學校

富山縣工藝學校

・井芹 一二

・藤原美治郎

・長谷川德巖

・宮崎彌太郎

・本田 利實

・戸波武五郎

・梶川 儀夫

・半澤 松吉

・吉田哲五郎

・波根 義三

・中島 次郎

〔。印は本校卒業生——編者記す。〕

東京美術學校近事〔一〇—四。M・四五・一・一〕

○圖書師範科生徒募集 今回本校にては、例によりて同科生徒を募集すべき旨發表せられたり。募集人員は約二十人、薦舉期限は四年三月一日より同月十四日迄に、本校に到着する様地方廳より薦書書を回送すべき規定にして、同科生徒は學資として一ヶ月金六圓を補給せらるべし。而してその撰拔試験は四月一日より本校内にて施行すべきに付、薦舉せられたるものは、三月三十日（土曜）午前中本校に出頭して、試験要項を承知すべき定めなり。尙詳細は十二月十六日官報廣告にあり。

関連事項

① 東京美術學校火災

明治四十四年一月二十五日の本校火災の状況については「東京美術學校近事」（49頁）に詳しく記されている。貴重な美術品や書籍は文庫に収蔵されていて延焼を免れたため、損害額は意外に低い値となったが、本館とともに焼失した本校創立当初以来の記録文書類は金銭に換算しがたいものであり、今日からみると実に大きな損失であったと言わねばならない。本館は、明治四十年度に始まった本校改築工事においてはこれに改修を加える計画であったが、焼失したため新築することとなり、大正二年に完成した。

『東京美術學校校友會月報』第九卷第四号を見ると、上記の「東京美術學校近事」の欄の外に文芸欄でも火災に関するものが掲載されている。沐川生の「焼跡」は新聞に幸徳秋水らの死刑執行の記事と本校火災の記事が並んで載ったことや、焼跡に集まって来た教員、生徒らの茫然とした様子を伝えており、広川菽泉（松五郎）の「灰燼」、夏川の「あとの三日目」、屋代晁江（鈇三）の「残烟」には焼跡に寄せる思いがうたわれている。また、写真部が撮影した焼跡の写真や川柳虹（誠）筆の焼跡スケッチが掲載されている。

火災後二月十三日までの間に本校ないし正木校長のもとへ届いた見舞状は八百通近く、その差出人住所姓名録が残っている。酒類、蜜柑、パン、弁当、菓子などの見舞品を届けた者も多い。高橋作衛は「Kioi」博士作石膏像」を寄附した。絵の具商杉山仙助は日本画科生徒のために絵の具一〇五個を寄附した。中村治兵衛も絵の具五十六個を寄附したが、これは図画師範科と西洋画科の生徒に分配